

■登場人物■

青山 一平（ミュージカル俳優志望・オーディション初参加）

一色洋平

曙橋 恵（オーディション歴4年目）

浅野千鶴

牛込 猛（オーディション歴の年目・自営業）

有川マコト

若松 浩介（オーディション初参加・広告代理店勤務）

野口雄介

神楽坂 五郎（オーディション初参加・フリーター）

本井博之

河田 正広（オーディション初参加・コンサル会社勤務）

森田ガンツ

大塚 太郎（某ミュージカル劇団の劇団員・演出部助手）

瀧川英次

開場中、オーディション光景（YouTubeなど）の映像が流れている。

客電が落ち、明転すると、ミュージカル作品のオーディション控え室。

壁際には派手な服装でヤル気満々な感じの中年男

（牛込、若松、神楽坂）がω人と、真面目そうな若い女の子（曙橋）がいる。

フロアを占領するようにウォーミングアップしていた青年（青山）が立ち上がり、客席に向かっておもむろに語り始める。

青山「青山一平、二十二歳です。僕、ミュージカル、大好き

なんです。子どもの頃から宝塚歌劇団のファンだった母に連れられて、色んなミュージカル作品を観ていました。バレエのレッスンも八歳から続けています。小学校のクラブ活動では合唱、中学校では卓球、高校ではダンス、大学では劇研に入っていました。総合的

なミュージカルっていうのはまだ：（言葉を濁してしばし考え）：総合的なミュージカルを学ぶのはもっと：（ぶつぶつ言いながら考えている）：総合的な表現としてのミュージカルが：：小学校のクラブ活動は合唱部、中学ではダンス部、高校で演劇部、大学ではミュージカル研究会に入っているのです、今回の公演にも学んできたことを活かし、みんなで素敵な作品を創り上げられたらと思っています」

青山、自信たっぷりな頷き、再び繰り返す。

青山「ミュージカルが大好きです。子どもの頃から宝塚歌劇

団のファンだった母に連れられて色々なミュージカル作品を観ていました。バレエのレッスンも8歳から続けています。小学校のクラブ活動では合唱、中学ではダンス、高校で演劇をやって大学ではミュージカル研究会に入っています。今回の公演の主役に選ばれたら、これまで学んできたことを活かし、みんなで素敵な作品を創り上げたいと思います。」

唐突に踊り始める。曲は「コーラスライン」の「アイ・ホープ・アイ・ゲット・イット」（音楽が流れても流れなくてもいいです）。

青山が踊っているそこに、演出助手（大塚）が入ってくる。その後ろからワイシャツ姿の中年男（河田）がオドオドした様子でついてくる。

大塚「じゃ、呼ばれるまでこちらでお待ちください」

河田「あ、どうもありがとうございます」

河田、中年男たちと距離を取って床に座り、ネクタイをゆるめ、通勤カバンから出したおしぼりで顔を拭く。

（以下の青山と大塚の会話の後ろで）河田が男たちの注視に気づき、皆におしぼりを配る。いいんですか、どうもすみません、たくさん持ってるんですね、など控えめに言葉を交わす男たち。河田、曙橋にもおしぼりを勧めるが、曙橋は丁寧な断る。壁際で、

あーとかうーとか唸りながら気持ち良さげにおしぼりで顔を拭く男たち。

演出助手に気付いた青山が踊りをやめ、出て行くこうとする大塚に駆け寄る。

青山「お疲れ様です」

大塚「お疲れ様です（ちらっとみて構わず行こうとする）」

青山「あの」

大塚、足を留める。

青山「お疲れ様です。あの、今、何番目くらいですか」

大塚「えー…：六百番くらいです」

青山「あの、控え室が別なのは、なんか基準があるんですか」

大塚「ないすよ。全館貸し切りで昨日の昼からやってるんで、部屋が一杯になったら隣りの部屋みたいな」

青山「ほんとですか」

大塚「受付順ですよ」

青山「いや、すみません。なんか（ちらっと後ろを振り返り

小声になる）不安になっちゃって」

大塚「……控え室は受付順に振り分けてますけど、呼ばれるのは、まあ一応、配役の候補で分けてますんで」

青山「ああ」

大塚「二秒で終る人もいるし、二十分踊らせる人もいるし、ちよつと待ち時間読めないんですよ」

青山「ですよ。すみません」

大塚「あ、バイトとかあるんだったら帰っちゃってもいいですよ。呼んだときいなかったらばんばん飛ばしてってるんで」

青山「いや、大丈夫です。すみません」

大塚、とうに部屋を去っている。

おしぼりでひと時寛いだ男たち、壁際で、ひそひそと話し始める。

河田「何時からいらしてるんですか」

神楽坂「あ、さっきです」

河田「ああ、さっきですか」

神楽坂 「緊張してると時間わかんないんですよ」

牛 込 「さっきってあんた、俺が朝十時に来たとき、もういたでしょ」

河 田 「朝十時」

神楽坂 「あ、そうでしたか」

牛 込 「いたでしょ。俺ちゃんと挨拶したでしょ、名刺もあげたよ」

神楽坂 「すみません」

若 松 「俺は二時間くらい前に」

牛 込 「だよね」

河 田 「朝一〇時って、もう夜の〇時ですよ」

牛 込 「待たされるのは覚悟してたけどね」

河 田 「ええー……」

若 松 「この部屋まだましですよ。他の部屋、すごい人がいて酸欠になりそうでしたから」

神楽坂 「あ、見たんですか、他の部屋」

若 松 「ええ」

牛 込 「なに、ねえ、すごい人がいて酸欠になりそうってのは、ものすごい鼻息の荒い人がいるとか、そういうことなの？」

若松「えっ」

神楽坂「揚げ足取りですねえ。そんなはずないでしょ」

牛込「だってそう聞こえたよ」

神楽坂「そんなはずないですよ」

牛込「他の部屋すっごい人がいて酸欠になりそうでした、つて」

河田「ああ」

神楽坂「だからそれは」

河田「助詞がないんですね」

牛込「は？」

河田「だから、助詞」

若松「ああ、ほんとだ、助詞がなかった」

河田「ね。助詞がないから」

若松「ですね。他の部屋にすっごい人がいて酸欠になりそうでした」

神楽坂「そういうことじゃないよ」

若松「他の部屋にすっごい人がいて酸欠になりそうでした」

牛込「ほら、助詞入れてもやっぱりダメじゃない。他の部屋にすっごい鼻息の荒い人がいて酸欠になりそうでした、って意味に聞こえるもん」

河田 「ああ、そうだねえ」

若松 「他の部屋にすごいい人がいて酸欠になりそうでした：

：ああ、ほんとだ」

河田 「じゃ形容詞だ」

若松 「ああ、形容詞か」

河田 「ね、形容詞でしょ」

若松 「ですね」

河田 「他の部屋にすごいい鼻息の荒い人がいて酸欠になりそうでした」

牛込 「だろ」

神楽坂 「いや、いなかったんでしょ」

河田 「え？なんで？」

神楽坂 「それじゃ鼻息の荒い人がいたことになっちゃいますよ」

河田 「でも形容詞がないから」

若松 「他の部屋にすごいい鼻息の荒い人がいて酸欠になりそうでした」

牛込 「ほら」

神楽坂 「そんなはずないでしょう」

河田 「じゃ主語？」

神楽坂 「だからそういうことじゃないんですって」

若松 「私は、他の部屋に？」

河田 「そうそう」

神楽坂 「おかしい」

若松 「私が、他の部屋に？」

牛込 「だから何がすごいんだってことだよ」

若松 「鼻息」

牛込 「ほらほら」

神楽坂 「鼻息なんですか？すごいのが？」

若松 「ええ、いや、ええ」

牛込 「どっちなのよ」

河田 「鼻息なんですよね」

曙橋 「たくさん人がいて酸欠しそうってことなんじゃないん

ですか」

若松 「えっ」

河田 「ああ、なんだ、そういうことでしたか」

牛込 「ほら、やっぱり鼻息じゃないでしょ」

神楽坂 「ですよね」

若松 「いや、なんでもいいんですけど、まあ、そういうこと

ですかね」

牛込 「どうでもいいって気に食わないなあ」

神楽坂 「待ち時間長くて気が立ってるんだよ」

牛込 「あんたの方が先に来てたじゃない」

若松 「俺は二時間くらい前に」

牛込 「待たされるのは覚悟してたけどね」

河田 「ええー……」

若松 「この部屋まだましですよ。他の部屋、すごい人がたくさんいて酸欠になりそうでしたから」

神楽坂 「あ、見たんですか」

若松 「ええ」

青山 「全館貸し切りで六百人って言ってましたからね」

曙橋 「うわあ……」

みな、戸惑って黙り込む。

曙橋 「すごいですね、六百人で」

青山 「東京だけで六百人だよ。二千人の応募者から選ばれた六百人。燃えるよね」

曙橋 「いや、私なんかどんどん怖くなっちゃいますよ」

青山 「ダメだよ、そんな弱腰じゃあ」

曙橋 「ですよ。いつもそうなんです。いつも待ってるうち

に怖くなって、帰ってきちゃうから」

青山「え、待たされるだけ待たされて、オーディションは受けないってこと？」

曙橋「はい」

青山「結果が出ないのに諦めがつく？」

曙橋「まあ、どうせ落とされるし」

青山「結果が出てもいないのにそんなふうを考えちゃ、実力出せないじゃん」

曙橋「いや、ほんと実力なんてないから、出しても同じだと思います」

青山「そんな後ろ向きな気持ちでオーディションに来てるの？」

曙橋「大変だったんですよ、これでも。応募用紙に名前書くのもやっとで、ポストに投函した段階で力尽きちゃうんです、いつも」

青山「長いんだ」

曙橋「オーディション？」

青山「ここ、十回落とされた人とかもいるって聞くからね」

曙橋「初めてですか？」

青山「うん」

曙橋 「私、まだ四回目ですけど、さすがにもう諦めないとなあと思ってる」

青山 「じゃあ、今年こそちゃんとオーディション受けなきゃ。帰っちゃだめだよ」

曙橋 「でも、なんかこうやって待ってる間に逃げ出したくなっちゃうんですよ。こんなとこにいたくないって思っちゃって、ほんとにオーディション受けたいのかどうか、自分でもわからなくなっちゃって」

青山 「大丈夫だよ、自信持たなきゃ」

神楽坂 「そんなに押し付けなくたって」

青山 「……なんですか？」

神楽坂 「いや、なんでもないよ。ごめんね」

曙橋 「なんかすみません、皆さんのモチベーション落とすよ
うなことやって」

神楽坂 「いいよいいよ、自信なくて怖いって、わかるなあ」

若松 「でも、ちょっとは自信あるから、ここにいますよ
ね」

神楽坂 「いやあ、そうでもないんですよ」

曙橋 「ですよね」

牛込 「じゃなんでここにいますよ」

神楽坂 「それはまあ、見果てぬ夢っていうか」

曙 橋 「わかってるんです。怖くて逃げ出しちゃって結果が出せないから、諦めもつかなくて、もう四年もずるずるしてるって」

若 松 「だから、どっかでヤル気だせばイケるって思ってるってことですよね」

神楽坂 「だから、そうでもないんだって」

牛 込 「なんにしる勝負するつもりで来てるには違いないんだから」

曙 橋 「勝負……ですか」

牛 込 「勝負だよ、勝負」

青 山 「せっかくここまで来たんだからオーディションはちゃんと受けようね。そこで、あなたの持っている実力を全部出し切って、それでダメだったらきっぱり諦めればいいんだから」

曙 橋 「……ですよね」

牛 込 「なんかさ、今の若い子ってすぐデスヨネって言うんだけどさ、それって他人事みたいに一般論としては頷けるけど私の意思は違うんですっていうあれなわけ？」

曙 橋 「いえ、そんな」

牛 込 「だってそう聞こえるからさ」

曙 橋 「そうじゃなくて、その通りだって思ってる」

牛 込 「そうなの？」

河 田 「ヨ、が入るからですかね」

牛 込 「は？」

若 松 「デスネって言えばいいんだけど、デスヨネって言うからじゃないんですか」

曙 橋 「あ、すみません。デスネ」

若 松 「いや、そっちの方が他人事っぽいけどなあ」

青 山 「それはどうでもいいでしょ」

神楽坂 「君、さっき来たばかりなのにもう苛々してきたの？」

青 山 「別にイライラしてるわけじゃありませんよ」

神楽坂 「そう？イラッとしたでしょ、このおじさんに」

河 田 「あ、私、イラッとさせちゃいましたか。すみません。

いつもやっちゃうんですよね、イラッと」

青 山 「大丈夫ですよ。してませんよ。皆さん緊張してらっしゃるんだなあと思ってる」

神楽坂 「あ、そういえば、ゆるんでる」

若 松 「ほんとだ。なんかゆるんだなあ」

牛 込 「べちゃくちや喋ったからだよ」

曙橋 「私も、さっきまでお腹痛かったのに、平気です、今」

河田 「あそう、良かったじゃないですか」

神楽坂 「なんていうか、性に合わないんですよ、黙って緊張に耐えるとか」

若松 「ちよっと（一杯）ひっかけたくなりますよね」

牛込 「わかるけどさあ、そういうところなんだからしょうがないでしょ」

河田 「…今夜、帰れるのかなあ。私、駅からバスなんで、あんまり時間ないんですよ」

牛込 「だったらもっと早く来りゃ良かったのに」

河田 「仕事どうしても抜けられなくて」

若松 「今日は一日仕事潰す覚悟で来られてるんですか」

牛込 「まあ、自営だからね」

若松 「ああ、じゃあ割りかし自由だ」

牛込 「自由ってほど自由じゃないけどさ、まあ、今はもう店もあんま開けてないんで」

神楽坂 「お店屋さん？」

牛込 「うん、まあ」

神楽坂 「お店屋さんだ、いいなあ、お店屋さん」

若松 「いやいや、今、自営の方だって大変ですよね」

牛 込 「そうだね」

神楽坂 「でもさ、俺なんてこの年でアルバイトだよ」

若 松 「アルバイトですか、それはしんどいですね」

神楽坂 「しんどいよ。いいなあ、お店屋さん」

牛 込 「バイトはしんどいよな。俺も今の仕事やるまでずっと
バイトだったよ」

神楽坂 「家族、いるんでしょ」

牛 込 「まあ、人並みに」

神楽坂 「だよなあ。俺この年でまだ独りだもん」

青 山 「えっ」

神楽坂 「えって何、えって」

若 松 「まあ、最近は、そういう人も多いですからね」

牛 込 「そうそう」

神楽坂 「焼き鳥屋さん？」

牛 込 「は？」

神楽坂 「そうでしょ、焼き鳥屋さんでしょ、絶対焼き鳥さん
だよ、焼き鳥さんの顔だもん」

若 松 「ああ」

牛 込 「違うよ」

神楽坂 「じゃあ、焼きトン屋さんだ、ね、焼きトンさん」

牛 込 「なんでだよ」

神楽坂 「え、違うんだ、じゃあたこ焼き屋さん」

牛 込 「（むすつと押し黙っている）

神楽坂 「お好み焼き？」

曙 橋 「とりあえず焼くんですね」

神楽坂 「そうそう、これは焼く顔だから」

牛 込 「これって」

若 松 「あああ」

河 田 「そういえば、焼き魚屋さんってのはありませんよね、

巷に」

若 松 「ああああ」

曙 橋 「あ、そうですね。焼き魚屋さんって見たことないです」

神楽坂 「いや、魚じゃないよ、これは」

曙 橋 「あの、巷ってなんですか」

河 田 「巷？巷ってのは」

牛 込 「巷って使わないよな、今の子は」

神楽坂 「素股は使いますか」

若 松 「そのへん、って意味ですよね」

曙 橋 「そのへん？」

河 田 「そうそう、そのへんとか、そのあたりとか」

若松 「それ同じ意味です」

河田 「一つの言葉の意味だから同じでいいんです」

若松 「ああ」

曙橋 「え、じゃあ素股ってのは？」

神楽坂 「素股っていうのはね、」

牛込 「やめなさいよ、まったく」

若松 「こんなところでする話じゃないでしょ」

神楽坂 「あ、じゃ、ちょっと外出て話す？」

牛込 「そうじゃないだろ」

河田 「話題の問題ですよ。場所じゃなくて」

曙橋 「あ、すみません。訊いちゃいけないかったですか」

河田 「いや、知らないことを人に訊く姿勢はいいことですよ」

若松 「話題がね」

曙橋 「話題」

若松 「だって素股って、ねえ」

牛込 「ちよっとおかしいよ、あんた」

河田 「素股はまずいですよ」

神楽坂 「そう？」

牛込 「そう？って、素股だよ」

曙橋 「すっごく知りたい：」

青山「すみません、ちょっと集中させてもらえませんか」

曙橋「あ、ごめんなさい」

若松「ごめんね、おじさんたち五月蠅くて、緊張解そうと思
ってつい」

青山「わかりますけど。僕は緊張感高めていかないと実力出
せないタイプなんで」

若松「そうか。そうだよね。ごめんごめん」

青山「いいんです。雑音で集中できない僕の甘さですから」

神楽坂「いいなあ、自分に厳しいタイプ」

牛込「しーっ」

青山、無言で振り付けのおさらいをし始める。

河田「(ヒソヒソと)あの、まさか、あんなことやらないで
すよね？」

若松「(ヒソヒソと)どうですかね。僕は初挑戦なんで」

神楽坂「(ヒソヒソと)やるんじゃない？あれくらい。全国か
ら選ばれた六百人を更に選ぶんだから」

河田「ええーっ」

若松「さすが、規模が違うよなあ」

河田 「すごいんですね」

神楽坂 「演出の先生はアレでしょ、政治とかもやってるんですよ」

若松 「ああ、まあ、そういう噂ですよ」

曙橋 「へえ、そうなんですか」

神楽坂 「結局は政治家の発言とかも、そうやって演出されてるんだよね」

若松 「まあ、大舞台でのスピーチだけでしょ。普段はひどい失言が多いじゃないですか」

神楽坂 「そうやって見ると、小沢なんてのは巧い役者だったよね」

若松 「いやいや、小沢はダメでしょ」

神楽坂 「なに、あんた自民党でいいと思ってるわけ」

河田 「なんですか、こんな時に野暮な話しちゃって」

曙橋 「……大人って感じですね」

神楽坂 「だよね、俺もさ、なんか政治っぽいこと言うと自分が大人な感じするもん」

若松 「大人アピールの話題だからとってつけたようなこと言うんですね」

神楽坂 「俺さ、電車の中吊り全部目通すのに毎日2時間は電車

乗ってるんだよ」

曙橋「暇なんだ」

神楽坂「暇じゃなきゃこんなところ来てないでしょ、ねえ」

若松「そんなことないでしょ、全国二千人の応募があるん

ですよ。自民党を影で動かす大演出家先生の劇団なんですよ」

河田「自民党はもういいから」

曙橋「二千人啊」

牛込「今年はやるな、あれ」

若松「えっ、あれって、（青山の振り付けをみて）俺たちも

あんなのやるんですか？」

牛込「あれはやるね。俺、六回やってるけどさ、そのうちの

回はあれやったもん」

曙橋「六回ですか」

牛込「うん、六回」

曙橋「六回かあ。気持ちが強いですね」

牛込「強いつていうか、まあ、夢だからさ」

曙橋「夢」

牛込「あなただって、そうでしょ。四回目って言ってたっけ」

曙橋「はい」

牛 込 「夢があるんでしょ、ここに」

曙 橋 「ここに？」

牛 込 「ここっていうか、ステージにさ」

いつの間にか、河田・若松・神楽坂が青山の背後に
立って、見よう見まねで踊っている。ひどい。

曙 橋 「はい」

牛 込 「（踊るおじさんたちを視て）しかしひどいもんだな、
こりゃ」

曙 橋 「（少し笑う）でも、みんなやっぱり夢があるんですよ
ね」

牛 込 「どうだかなあ、あの人たちは、ちょっと違う気もする
けど」

曙 橋 「私、小学校のとき、一度だけ、人前で歌ったことがあ
って」

牛 込 「うん」

曙 橋 「学芸会で、合唱の発表だったんですけどね、ソロやっ
てた子がお腹壊しちゃって」

牛 込 「ありがちだよなあ」

曙 橋 「みんなで相談したんですけど、ソロの部分をちゃんと覚えてるような子はどのパートのグループでもいなきや困るって言って、出してくれないんです」

牛 込 「なるほどね」

曙 橋 「自分のパートのグループから、いらないうって言って放出されたの、私だけだったんです」

牛 込 「それはだって、ソロが歌えるって認められてたってことじゃないの」

曙 橋 「いやあ、お荷物だったんですよ。ソロなら一人で恥かくだけだから」

牛 込 「みんなで力を合わせてやってるときに誰かに恥かかせようなんて思わないでしょ、普通」

曙 橋 「でも、本番で私が歌う番になると、みんなちよつとため息ついたりするの、聞こえたんです」

牛 込 「ブレス、ブレス」

曙 橋 「客席からくすくす笑いも聞こえて」

牛 込 「小学生だろ、集中して観てられないからお喋りしてたんだよ」

曙 橋 「ソロのときはみんなより一歩前に出るんですけど、こ
う、私の後ろにいるみんなの、なんかどよーんとした

感じが、萎え萎えな感じが背中に伝わるんです」

牛 込 「そんなことないって」

自分の踊りに夢中になっていた青山、おじさんたちが真似しているのに気付いて、指導をし始める。

おじさんたち、素直に教わっている。

曙 橋 「歌いながら、みんなが私のこと可哀想って思ってるんだって気がついて」

牛 込 「そんなことないでしょ。あんた、ずっとそんなふうに思ってたの？」

曙 橋 「はい」

牛 込 「歪んでるなあ」

曙 橋 「だって、それまでもそれからも、人に注目されることなんて一度もなかったし」

牛 込 「あんた、自分でそれを避けてるだけでしょ」

曙 橋 「そうなんですよね。さすがにこの年になってそういうことじゃなかったのかもって、考えるようになって」

牛 込 「遅いよ」

曙 橋 「確かめなきゃって」

牛 込 「気の持ちようっていうかさ、それは受け止め方の問題
でしょ」

曙 橋 「私一人に恥かかせてみんな笑ってたってことじゃない
としたら、やっぱり、いつも目立たないちーちゃんが
こんなに頑張ってるんだからやらせてあげようよって、
憐れまれてたんですかね」

牛 込 「憐れみじゃないじゃない、みんな応援してたんだと思
うけどなあ」

曙 橋 「じゃあ、せっかく応援してるのについて、みんなをがっ
かりさせちゃったんだ」

牛 込 「もうちょっと自信持ちなさいよ」

曙 橋 「自信なんて持てないですよ。自信が持てるような結果
を一回も出せてないんですから」

牛 込 「あのね、違うよ。結果なんかじゃなくてさ」

曙 橋 「わかってます」

牛 込 「……そう」

大塚が入ってきて、声をかける。

大塚 「えーと、お待たせしました。青山一平さん」

青山「はい！」

大塚「二階のホールが会場ですんで」

大塚、さっさと出て行く。

若松「がんばって」

河田「君なら受かるよ」

神楽坂「俺もすぐ行くから」

青山「じゃあ、行ってきます。皆さんも、頑張って」

青山、緊張の面持ちで出て行く。

残ったおじさんたち、素直に練習を続ける。

曙橋「でも、ほんとかんなくて思うんですよ。挑戦することに価値があるとか、参加することに意義があるとかって言いますが、結局のところ結果が重要じゃないですか。評価されるのはいつでも結果でしょ。価値や意義なんか、誰も評価してくれませんよ。だったら、何もせずにいたって同じだと思うんです。みんなをがっかりさせてばかりなのに、自分まで自分にながっかり

しちゃったら、自分のこといらなくなっちゃうじゃないですか。みんなに好かれたいなんて今さら思わないけど、誰にも嫌われたくないって思うし、何より、自分で自分のことを嫌いになりたくないから」

牛 込 「そんで？」

曙 橋 「？」

牛 込 「それでもステージに夢があるから、ここにいてるんですよ」

曙 橋 「確かめるために」

牛 込 「何を」

曙 橋 「挑戦することに価値があるとか、参加することに意義があるとかってことが、ほんとだったんだって思いたいから」

牛 込 「ふーん」

曙 橋 「……ダメですよ、そんなんじゃない」

牛 込 「いいんじゃない」

曙 橋 「だってみんな真剣に、本気で、素敵なステージにしたって、お客さんに感動を与えたいって、そのために猛烈な努力してたり、生まれながらにスポットライト浴びてるような才能を持った人たちばかりが、ここ

に集まるんだから、やっぱりそんなんじゃダメですよ」

牛 込 「そう思っ、毎年、諦めてきたんだ」

曙 橋 「はい」

牛 込 「俺は違うと思うな。俺はね。そんなに純粋な情熱ばかりじゃないと思うよ。だって、そんなんばかりだったら気持ち悪いでしょ。そんなの宗教団体みたいじゃない。もっとエゴとか野心とか下心とか、それこそ自己実現みたいなものをすり替えてる奴がいるだろうし、当たり前前に色々あると思うけどね」

曙 橋 「ミュージカル、客席で観るの、大好きなんです」

牛 込 「うん」

曙 橋 「みんなキラキラしてて、素晴らしい才能があつて、でもきつともものすごい努力を積み重ねてきてるんだろうなあつて、そういう人になりたいなあつていうか、そういう人たちを観られるだけで、いいなあ、素敵だなあつて、涙が出てきちゃうんですよね」

牛 込 「だからさ、それはみんな同じ。何かしらの理由があつて、何かを夢見て、それを叶えてるから、キラキラしてるんだよ。その理由なんてなんだっていいじゃない。あんたさ、コーラスラインのメッセージ、届いてない

でしょ」

曙橋 「メッセージですか。コーラスラインは二十回くらい観てますけど」

牛込 「あれだよ、メインの役につけない後ろで並んで踊ってるだけの連中がさ、一人ずつ夢を語ってるのを見せられるとさ、誰だって自分の人生の主役なんだって思えるよね」

曙橋 「でも、このミュージカルではこの人たち主役じゃんとて思います」

牛込 「ねえ、あなたは どうしてそんなに絶望してるの？」

踊っていたおじさんたちが自分たちに拍手する。

若松 「これでもうみんな完璧ですね」

神楽坂 「鉄壁だよ、鉄壁」

河田 「もう一回いいですか」

神楽坂 「あんまり練習すると本番でバテるよ」

河田 「それもそうか」

若松 「じゃあ、ちよつと休憩してから、もう一回」

牛込 「ねえ、あんたたち、なんで今日ここにきたの」

若松「え？」

牛込「俺はさ、自分を変えたいんだよ」

神楽坂「変えなくていいじゃない、お店屋さんだし家族もいるし、何が不満なの」

牛込「俺、腸が弱くてさ」

河田「腸って、大腸とか小腸とかの、腸」

牛込「うん。大腸とか小腸とかの腸が、弱くてさ」

神楽坂「下痢症だ、ね、下痢症いたよなあ。遠足とか運動会とか、参加できないタイプ」

牛込「そうなんだよ」

若松「いたなあ。卒業式も来れなかった奴いたよ」

牛込「そうなんだよ。学芸会でくじ引きで主役になって、どんなに張り切って練習してても、本番になると腸がさ」

河田「悔しいんでしょね」

牛込「悔しいよ。悔しいから悔しがるだろ、そうするとみんな、じゃあ名誉挽回だ復活戦だって、次も俺にやらせようとするんだよ」

神楽坂「でもダメなんでしょ」

牛込「そうなんだよ」

若松「卒業アルバムの撮影とかも来なかったなあ、あいつ」

牛 込 「そうなんだよ。小学校から高校まで、俺、思い出がないんだよ。多分、同級生だった奴、誰も俺のこと覚えてないよ」

若 松 「あいつ、なんて名前だったかなあ。そーいや顔も思い出せないなあ」

神楽坂 「そういう奴はいなかったってことでいいでしょ」

牛 込 「だろ。そうなんだよ。だからさ、俺、このまんまじゃ俺の人生が全部なかったことになっちゃうような気がしてさ、このままじゃいかんと思って、自分に緊張を強いるよう訓練したわけ」

神楽坂 「人生がなかったことにできるんなら、俺はむしろその方がいい」

牛 込 「俺は嫌だ」

河 田 「聞きたいなあ。どんな訓練をされたんですか」

牛 込 「危険を冒すんだよ」

若 松 「例えば？」

牛 込 「自動改札を突破したり」

若 松 「……」

河 田 「危ないなあ、それは危ないですね」

若 松 「じゃあ、当然、駆け込み乗車とかも」

牛 込 「ああ、まあ、一度か二度はやったな」

河 田 「危ないですよ、駆け込み乗車」

若 松 「他には」

牛 込 「信号無視」

河 田 「危ないじゃないですか！」

牛 込 「横断歩道のないところで」

河 田 「危険すぎますよ」

若 松 「他には」

牛 込 「まあ、よくやったのはピンポングッシューかな」

河 田 「だめだ、私、ピンポングッシューって聞いただけで動悸

がしてきますよ」

曙 橋 「あんなに激しく踊ってたのに」

神楽坂 「痴漢した？痴漢」

牛 込 「いや」

神楽坂 「じゃ万引きは？置き引きとかさ」

牛 込 「いや」

神楽坂 「出会い系、やったことある？」

牛 込 「いや」

神楽坂 「痴漢も万引きも慣れるんだけどさ、出会い系だけは毎

回緊張するよ」

若松「あんた、それ全部犯罪じゃないか」

河田「え、出会い系も犯罪ですか」

若松「やってるんですか」

河田「やってませんよ。出会い系なんて、そんな聞いただけで脂汗が出ますもん」

曙橋「あの、そういう訓練、私もした方がいいんでしょうかね」

若松「いいよ、しなくて」

牛込「俺には必要だったんだよ」

河田「それで、結果は」

牛込「どうやってもダメだったことがよくわかった」

若松「あー」

牛込「自動改札を無理矢理通り抜けるだろ、あのガッツて扉んとこに身体が当たる瞬間に、ちよっと出ちゃうんだよ」

神楽坂「下腹部に当たるからなあ」

牛込「そのときの恐怖体験が記憶されちゃうと、次はもう改札通るだけでダメだ」

若松「電車乗れないですね」

牛込「まあ、それが脱サラのきっかけだよ」

若松「あー」

河田「こういうところは平気なんですか」

牛込「平気じゃないよ。毎回ぶりぶりだよ。だけど俺は諦めない」

河田「立派だなあ」

牛込「三回目くらいから、どのへんで一番緊張が高まるか掴めてきたんだよね。そうすると、来るなつてのがわかるから、こう、ぎゅっとね、ぎゅっとするんだよ。そんときに、腹に力がいかないようにしないとダメなんだけどな、それでなんとかやり過ぎて、やったぞと思ったらヤバい。そこで来る。だから、毎年少しずつ少しずつ、ここやり過ぎしたら次はここ、それを超えたら次はここって、越えられる山場が増えていく」

河田「着実な進歩ですね」

牛込「今年は、最後までいられる気がするんだよな」

河田「あなたならいけますよ、絶対」

若松「いられるって、最終選考までってことですか」

牛込「いや。一次選考の最後までってことだけど」

若松「あ、最初のオーディションで最後までやれないんだ」

牛込「だから、今年はいける気がするって言ってんの」

若松 「そうかあ。そうですね。今年はいけますよ、きっと」

神楽坂 「ね、給料出るってほんとだよね」

若松 「は？」

神楽坂 「給料出るんでしょ、ここに入ると。歌って踊って給料

貰えるなんて夢のようだよね」

若松 「何、あんた、それ目当て？」

神楽坂 「就活だよ、就活」

若松 「そういう人、いるんだ」

河田 「へえ、給料が出るんですか」

若松 「そう聞きますけどねえ」

河田 「そりゃいいですね。私ももし受かったら会社やめよう」

若松 「会社との両立は難しいんじゃないかなあ」

河田 「そうですねえ。いや、私実は、出向でして」

若松 「出向？」

河田 「まあ、派遣、というか」

牛込 「なんの」

河田 「上司に行けって言われたもんで」

若松 「なんのお仕事なんですか」

河田 「まあ、あんまり大きな声で言えるあれじゃないんです
けど」

牛 込 「なんの仕事よ」

河 田 「実は、私、殺し屋なんです」

神楽坂 「え、あんたもお店屋さん」

河 田 「いや、お店じゃないんですけど」

牛 込 「はあ？」

若 松 「あの、今なんて言いました、すみません、ちょっと聞き取れなくて」

河 田 「すみません、大きい声で言えないもんですから」

牛 込 「（ヒソヒソと若松に）殺し屋って言ったよな」

若 松 「（ヒソヒソと牛込に）やっぱりそう聞こえました？」

河 田 「なんか皆さん情熱がおりなのに、私はそんなんで本当に申し訳なくてね、肩身狭いなあって思ってたんですよね。でもあれですね、さっき振り付け教わったじゃないですか。なんか楽しくなってきたやいましたよ。私の人生でツイステップ踏むことなんてなかったんですもん。日陰の人生ですからねえ」

牛 込 「（ヒソヒソと若松に）本気で殺し屋？」

河 田 「今日も渋々に来たんですよ。これまで目立たないよう目立たないようになって生きてきて、いっつも緊張し続けて、ミュージカルなんて華やかな世界、縁があり

ませんからね。あれですよ、カラオケで歌ったりすると、気持ちがスカーツとするでしょ、あれってね、日頃押し殺してる、」

若松「（ヒソヒソと牛込に）今、殺してるって言いましたよ」

牛込「（ヒソヒソと若松に）本物かよ」

河田「押し殺してる感情が解放されるんですよ。そうですよ、表現ってそういうものなんですよ。そうしないようにしてきたのに、いきなりそれをやれって言われても、そうすぐにできるもんじゃありませんからね。難しい案件だなあと思ってたんと参ってたんですけどね、さっきのアレで、ツイステップで、なんかもしかしたらこの仕事うまくいきそうな気がしてきてね。でも、この仕事うまくいったら、また次の仕事も回されるんですよ。ますます華やかな世界からは遠ざかりますからね、悩みどころですよ。実は、結構子ども頃からお調子者って言われてて、人前でひょうきんに振る舞うの、好きなんですよね。会社でもね、忘年会では腹話術やったりして、宴会課長なんて言われてね、經理の女の子にファンになっちゃいましたあーなんて」

若松 「(ヒソヒソと牛込に) 殺し屋の忘年会ってスゴそうです
ね」

牛込 「(ヒソヒソと若松に) 忘れて欲しくないよな」

曙橋 「もしかして、ゴルゴですか」

神楽坂 「ああ、ゴルゴか」

河田 「え、ゴルゴ?」

曙橋 「ゴルゴですよ」

神楽坂 「なんだ、ゴルゴなんだ」

河田 「ゴルゴって」

曙橋 「サーティーンですよ、サーティーンですよ」

神楽坂 「そうそう、ゴルゴはサーティーンだからね」

河田 「ああ、ゴルゴサーティーン」

曙橋 「ね」

河田 「いやあ、そんな有名なあれじゃないですけどね」

神楽坂 「有名になったら商売できないしね」

河田 「そうなんですよ。だからね、まあ下請けで細々とやっ
てるだけで」

神楽坂 「なに、誰殺るの」

河田 「それは言えませんって」

神楽坂 「まじか。まじで殺るのか」

曙橋「殺しのオーディション、って二時間ドラマみたいですね」

河田「ちょっと、ナイショにしてくださいよ」

神楽坂「言わないよ。チンコは柔くても口は固いんだ」

若松「あの」

河田「はい」

若松「会社っていうのは、もしかして、何何組とか、そういうアレなんでしょうか」

河田「あ、申し遅れまして、わたくし、株式会社東郷の河田と申します（名刺を差し出す）」

若松「リスクマネジメントコンサルティング……まあ、コンサルティング……」

河田「いやあ、社長が一代で立ち上げた当時は東郷平八郎商店なんてダサイ社名だったんですけど、一昨年、社名変更したんですよ。扱ってるのは相変わらず殺し一本なんですけどねえ、今どきはコンサルティングってつけどくと通りが良いもんで、領収書の宛名も書き易くなったわねって接待で使ってるスナックなんかでもね」

牛込「（ヒソヒソと若松に）この名刺、貰えないでしょ」

若松「（ヒソヒソと牛込に）受け取らないわけにいかないで」

しよ
」

河 田 「何かご用命がありましたら、いつでも」

若 松 「ご用命、あるかなあ、ないと思うけど」

河 田 「こんなご縁ですし、勉強させて戴きますよ」

若 松 「あ、じゃあ、そういうことがあったら是非」

河 田 「ないでしょ」

若 松 「あ、ええ、まあ、そうですね」

河 田 「なくていいんですよ」

若 松 「すみません」

河 田 「世の中のためにはうちの会社なんて潰れたらいいんで
す」

若 松 「……」

河 田 「競合がいればすぐに潰れるはずなんだけどねえ。いな
いから。事実上、独占市場だから」

若 松 「あ！まさか、あなた、この先生を！」

河 田 「……（ニヤリと笑って答えない）」

若 松 「うわ、そりゃ大ごとだわ、選挙あれだったからですか、
やっぱり」

河 田 「まあ、私ら下請けにはそこまでわかりませんが」

若 松 「うわあ」

神楽坂 「給料いいんでしょ」

河田 「とんでもない。この一〇年経費カットはあっても昇給
なんかありませんよ」

若松 「いやほんと、うちですよ。どこも同じですねえ」

牛込 「あなたは」

若松 「まあ、うちは一応、東証一部ではありますけど、それ
でもやっぱり厳しいですよ」

牛込 「会社のことじゃなくてさ」

若松 「は？」

牛込 「あなたは、なんで今日ここにいるんだよ」

若松 「いや、俺なんか別に面白くもなんともないあれで」

牛込 「別に面白い話しろって言ってないよ」

若松 「いやほんと、ただの憧れですよ、憧れ」

河田 「憧れは私にもありますけど」

牛込 「あなたの話はいいよ、怖いから」

若松 「まあ、俺の場合、退屈な人生のカンフル剤っていうか、
なんか急にね、思いついたんですよ」

曙橋 「急に思いついた？」

若松 「そう、ほんとに急にね。広告関係の営業なんですけど
ね、大きな公演だとチケットが回ってくるんですよ、

ノルマ捌けなくて抱える奴もいっぱいいて、俺も自分で三回とか通って消化するわけです。嫌いじゃないんですよ。暗い客席に身体置いてると、なんだかほっとするようなところがあって、劇場っていう場所が好きなんでしょね。だから三回でも五回でも観に行くんですけど、来年、切られちゃって。この五年ずっと定着してた案件だったのにいきなり他社にかっさらわれたんですよ」

河田「ああ、そりゃ根回しがあったんでしょ」

若松「そうですね。そうだと思います。けど出し抜かれた俺ら営業チーム全員、夏のボーナス減らされてね、たまらんですよ」

牛込「それはたまらんなあ」

若松「たまらんです。自棄っぱちだと思われるかもしれませんが、自分で、自分なりの落とし前というか。売る側で切られたんだからいつそ出る側、作る側に潜り込んでやれって思いついたんですよ。どうせお偉い演出の先生なんて、俺らの顔も名前も知らないまんまやってきてるんだし、笑えると思うんですよね、俺今日ちょっとあれの案件だから残業無理とかって言って、お前なんだ

よあれ終わってんだろって同僚が言うでしょ、そしてら違うんだよ売らんじゃなくて出るんだよって、はあなんだそれどういうことだよとかって、まじかよ何やってんのお前って、ね、どんよりしてる営業部、ちょっと盛り上がるじゃないですか」

河田「でも、やっぱり観てるうちに、そっち側に行きたくなっただけでしょ。憧れに気がついたっていうかね」

若松「いや、俺、営業の仕事、好きなんです。ミュージカルなんてド素人だし、観るのは好きでも歌って踊って演技してって、そんなセンスありませんよ。でもね、そんなド素人の俺がもし何かの間違いでオーディションに合格して、ステージに上がれたら、ちょっと小気味いいじゃないですか。まあ、営業特有の屈折したストレスなのかもしれないけど、絶対、チームのみんながバカやってるなあって俺のこと大笑いして、さ、じやあもういつちよやるかって、いつものテンションが戻ってくると思うんですよ。それを夢見て応募したんですけどね、まさか受かるはずないでしょ、受かるなんて思ってませんよ。だから、明日にはもうネタバラシするんです。実は俺昨日さって、それで、バカなこ

とやってる暇あったら一件でもつないでこいって蹴飛ばされるんです。それでいいんです」

牛 込 「落とし前か」

若 松 「落とし前です」

河 田 「それはそれで、なかなかの本気ですよね」

若 松 「本気ですよ、もちろん」

河 田 「ああ、本当に申し訳ない。そんな本気の人たちのチャンスを台無しにするような仕事なんて、私はどうしたら」

牛 込 「それだって本気でしょ」

河 田 「そりゃ本気ですよ。請け負った仕事は何があってもやり遂げるのが社訓ですから」

牛 込 「あんたも」

神楽坂 「俺は自慢じゃないけど崖っぷちだよ」

牛 込 「俺だって、本気だ」

若 松 「でも、あなたの場合、医者に行けばいいんじゃないんですか」

牛 込 「自力で克服しなきゃダメなんだよ」

河 田 「そうですよ、医者行った方が早いでしょ、本気なら尚更」

牛 込 「医者なら行ったよ」

神楽坂 「女医？そうでしょ、ね、女の医者だったんでしょ」

若 松 「そんなばかな」

河 田 「女医かどうかは関係ないでしょ」

牛 込 「あるんだ、関係あるんだよ」

神楽坂 「ほら」

若 松 「女医なの？」

牛 込 「（頷く）」

河 田 「女医さんかあ」

牛 込 「（激しく頷く）」

神楽坂 「美人だ」

牛 込 「（もの凄く激しく頷く）」

若 松 「ああ、それじゃあなあ」

牛 込 「だろ。自力で克服しないとダメなんだよ」

曙 橋 「恥ずかしいんですか？」

牛 込 「……」

曙 橋 「他のお医者さんに行けばいいじゃないですか」

牛 込 「！」

神楽坂 「他じゃダメなんだよ。惚れちまったんだから」

曙 橋 「ああ、好きになっちゃったんだ」

神楽坂 「好きな女には会いたい、だけど緩いケツは見せられな
いってな」

曙 橋 「あの、うちのお父さんも痔があって、恥ずかしくてお
母さんにナイショにしてて、すごい悪化して大手術し
たんです。だから、」

牛 込 「痔じゃないから。腸だから」

曙 橋 「そうですけど、でも、肛門は腸のはじっこでしょ」

牛 込 「俺の場合ははじっこじゃないんだよ、全体、腸全体、
大腸とか小腸とかの全体」

曙 橋 「全体だったら肛門も一部ですよ」

神楽坂 「いいなあ。もう一回肛門って言ってくれる、録音する
から」

若 松 「あんたちよつとおかしいよ」

河 田 「こんなに身体張ってる人がいるのに私がしようとして
いることを考えると」

牛 込 「いいんだよ、理由なんて、みんなそれなりに本気かか
ってんだから。（曙橋に）だろ？」

曙 橋 「あ、え、もしかして、今のくだらない話、私を励ます
ために」

牛 込 「そうだよ」

曙橋「なんか、すみません、私なんかのこと、皆さんの方がよっぽどどん詰まりなのに」

男たち、むすっと押し黙る。

若松「じゃ、もう一回、さっきのおさらいしますか」

河田「そうだ、やりましょう、ツーステップ」

いそいそと立ち上がる三人。

神楽坂「なんだよ、もっと早くやってくないと、もう忘れちゃったよ」

若松「えっ、もう忘れちゃったんですか。あんなに練習したのに」

神楽坂「あんなにってほんの数分だよ」

河田「あれ？（ステップが思い出せない）」

神楽坂「でしょ」

河田「忘れちゃった」

神楽坂「ほら」

若松「……（ちよつと不安）……ん（思い出せない）」

神楽坂 「だろ」

呆然と立ち尽くす三人。

牛 込 「まったく、本気の程度が知れてるよなあ」

曙橋、徐に立ち上がり、

曙橋 「私、覚えてますよ」

曙橋がステップを踏む。

若松 「おお！」

神楽坂 「ああ、そんなだったなあ」

河田 「そうそう、これでしたよ、これ」

若松 「視てるだけで覚えたんだ」

河田 「脳みそが若いんだねえ」

神楽坂 「見るからに、もう、全身むっちり若いじゃない」

若松 「そういう意味じゃなくてさ」

曙橋に教わりながら練習するおじさんたち。

曙橋、とても楽しそうに踊っている。

見物していた牛込が立ち上がり、

牛込「ちよっと（河田を手招きする）」

河田「はい」

河田、動きを止め、牛込に近寄る。

牛込「あんたの仕事、ちよっと待てないかねえ」

河田「え、待つってというのは」

牛込「（顎で曙橋を差す）」

河田「え」

牛込「受けさせたいだろ、オーディション」

河田「え、ああ、ええ」

牛込「あんたが心配してる通り、あんたの仕事が始ったらオーディション無しだろ」

河田「そうですよね」

牛込「俺たちはどうでもいいけど、あの子はさ」

河田「ええ」

牛込「受けさせたいだろ」

河田「ええ」

牛込「どんな順番で呼ばれるか知らないけど、もしあんたが先に呼ばれても、仕事はちよっと待ってくれよ」

河田「でも、上司に確認しないことには、私の一存ではどうにも」

牛込「人殺しだけならまだ赦せるけどさ、人殺しでサラリーマンって、最低だな」

河田「申し訳ありません」

牛込「（舌打ち）」

河田「私も辞めたいんですよ、ほんと、この仕事」

牛込「辞めればいいじゃない」

河田「そうですよね。辞めればいいんですよね。なんで辞めないんでしょうね。やることなくするのが怖いんですかね」

牛込「それだけきつい仕事やってきたんだから、どんな仕事だってできるだろ」

河田「自分を変えるのが怖いんですね、きつと」

牛込「あんた、自分のこと好きなんだよ、卑屈なこと言う割

に自分大好きなナルシストだ」

河田「みんなそうでしょ」

牛込「そうか」

河田「自己嫌悪だってナルシズムですよ」

牛込「そうか。そうだな」

河田「この仕事放り出したら、クビだろうなあ」

牛込「いいじゃない、クビでも」

河田「そうはいきませんよ」

牛込「家族いるんだ」

河田「いいえ」

牛込「いないの？ひとり？」

河田「はい」

牛込「なんだ、俺はまたてっきり病気の娘がいてアメリカで手術を受けるためにすごい金がかかるとか、そういうあれだと思ってた」

河田「それ、詐欺ですから」

牛込「詐欺じゃなくてさ、あるでしょ、ネットでもよくそういうブログあるじゃない、俺、寄付したもん」

河田「詐欺ですよ、それ」

牛込「うそ」

河田「何何ちゃんを救う会とかいう、あれ」

牛込「そう」

河田「同じ写真と同じ病気の子で、名前が違うサイト、いっぱいあるんですよ」

牛込「うそ」

河田「病気だってなんだって娘か息子がいたら、こんな仕事やってませんよ」

牛込「そうかあ」

河田「マンションも買ったしベンツもありますけどね、家族どころか友達もいませんからね」

牛込「詐欺なのかあ」

河田「笑ったり泣いたり、飛び跳ねたりくるくる回ったり、大きな声で歌ったりするの、楽しいでしょうねえ」

牛込「そうかあ、くっそ、三万も寄付したのに」

若松が動きを止め、汗を拭きながら、

若松「いいんですか、練習。そろそろ呼ばれるかもしれませ

んよ」

神楽坂「いいんだよ、あの人、ゴルゴだもん」

河田「ゴルゴって言うなよ！（叫ぶ）」

牛込「おい」

神楽坂「だってゴルゴでしょ」

河田「ゴルゴって言うな！」

若松「どうしたんです」

河田「頼むから、ゴルゴって言わないで（泣く）」

曙橋、不安げな顔で寄ってくる。

河田、曙橋の手を取り跪く。

河田「（力強く）おじさん、今、葛藤してるんだ！」

大塚が来る。

大塚「お待たせしました。えーと、河田正広さん」

河田「選択のときだな（低い声で）」

曙橋「大丈夫ですよ。選ぶのはあっちですからリラックスして」

牛込「……（じっと河田を視る）」

大塚「じゃあ河田さん、二階のホールにお願いします」

大塚、去ろうとする。

若松「あの、すみません」

大塚「はい」

若松「もうけっこういい時間なんですけど、ちゃんと俺らも見てもらえるんですよね」

大塚「まあ、一応はそういうことになってますけどね」

若松「一応はって」

大塚「（時計を見て、ため息）ぶっちゃけ言いますと、人数多過ぎるんで脈有りから見てるんですよ」

若松「脈っていうと」

大塚「まあ、経歴とか、事務所とか、そういう」

若松「ははあ。え、じゃあなんでゴル……、河田さんが次なんですか」

大塚「河田さんね、（書類を見ながら）八歳でニューヨーク・ブロードウェイにデビュー、十四歳でロンドン国立演劇学院に留学、十八歳で帰国して東郷平八郎一座に入団、女形として活躍とありますから、多分ヒロインの枠でのオーディションでしょう」

若松「（ヒソヒソと牛込に）ほんとはですか？」

牛込「（ヒソヒソと若松に）ほんともか？」

若松「（ヒソヒソと牛込に）確かにどっちがほんともかしくないような得体の知れない感じありますからね」

大塚「もっとぶっちゃけるとですね、せっかく待って戴いてるんですけど、先生が終わりッて言ったら終わりですから」

若松「えっ、じゃあ」

大塚「脈有りから見てって大体のキャストが埋まれば終わりだし、そうでなくても先生がしんどくなったら終わりなんで」

若松「そんな」

大塚「すいません、そういう内情なんで、あれだったらお帰りになっても大丈夫ですんで」

曙橋、いつの間にか荷物を持っている。

曙橋「すみません、私やつぱり帰ります」

大塚「あ、そうすか。お疲れしたー」

曙橋「皆さん、頑張ってください」

若松 「なに、それはダメでしょ、ねえ」

牛込 「それはダメだな」

神楽坂 「ダメダメ、まだ録音してないし」

行こうとする大塚を河田が引き留める。

河田 「先生は、もう大分お疲れなんでしょうか」

大塚 「あ、ああ、そうすね。かなり朦朧としてきてると思います

ます」

河田 「そうですね」

神楽坂 「なんだよ、俺たち回ってこないな、こりゃ」

大塚 「お帰りになってもぜんぜん大丈夫なんで」

曙橋 「ですよね」

若松 「待ちなさいよ」

河田 「私、帰ります」

大塚 「いや、河田さんもう次ですから」

河田 「私、帰りますから」

曙橋 「行って来てくださいよ、次ですよ。せっかく待ってたんだから」

河田 「代わりに、この子、見てください」

曙橋「ええっ」

神楽坂「あれ、仕事いいの、仕事」

牛込「いいんだよ」

大塚「（書類を見て）まあ、河田さん飛ばすと次は曙橋恵さ
んですけど」

河田「だって、先生もう限界でしょ」

大塚「確かに、今もまさにもう終わりにしようかって言いそ
うではありますけど」

河田「だから、この子、見てください」

大塚「じゃ曙橋さん、二階ホールにお願いします」

曙橋「そんな無理です無理です、ていうか無駄ですから」

若松「無駄ってことないだろ」

牛込「行ってきなさいよ、ダメ元でさ」

神楽坂「ダメ元ってたいがいダメだよね」

曙橋「そうですよ、ダメですから私なんか絶対、行っても意
味ないですよ」

河田「意味はある」

牛込「あるよ」

若松「あるから、ちゃんと」

神楽坂「給料貰えるかもしれないんだから」

河田「行きなさい」

曙橋「無理です」

牛込「みんな無理なんだよ」

若松「そうだよ。俺たちだってみんな無理だよ」

曙橋「でもみんな本気でしょ」

神楽坂「本気でも無理だよなあ」

若松「無理だよ」

牛込「無理だな」

河田「行きなさい」

大塚「……曙橋さん飛ばすと、次は、」

牛込「飛ばないよ」

河田「曙橋さん、行きますから、お願いします」

「お疲れ様ですー」と声がして、青山が戻ってくる。

若松「あ、お疲れ様です」

青山「皆さん、まだだったんですか」

若松「うん、まだ」

牛込「これから曙橋さんが」

曙橋「いや、私、やっぱり帰ろうと思って」

青山「ええ？今年も敵前逃亡するの？」

牛込「だよなあ」

若松「チャンスなんだからさ」

大塚、時計をちらりと見て、去ろうとする。

神楽坂が呼び止める。

神楽坂「あの、給料いくらすかね」

大塚「は？」

神楽坂「出るんでしょ、給料」

大塚「ああ、出ますよ。劇団員になればね」

神楽坂「いくら」

大塚「まあ、年齢なんかによって、それなりには」

神楽坂「じゃ、曙橋さん飛ばして次俺にして」

若松「図々しいな、あんた」

大塚「いいっすよ、誰でも別に」

若松「誰でもってそんな」

大塚「いやね、ぶっちゃけ、いいんすよ、ほんと、誰でも。

どうせあんたら箸にも棒にもかかんないんだからさ。

だって無理だもん、マジで、あんたら。どうやっても

無理だから、無理。ほんとね、なめられてんなーって凹むんすよね、毎年毎年さ、アホかつつうのがわんさか集まってきてさ、俺だって好きで演出部についてるわけじゃないんだからさ、劇団員の一人として、ちゃんとレッスン受けてたんだしさ、今年こそって思ってるわけですよ、俺だってさ。オーディション受けるくらいでチャンスもくそもないでしょ、紙に名前書いて写真貼って申し込むだけなんだから、いや仮にそれがチャンスだとしてもさ、今一次審査なわけでしょ、受かったとするよ、頑張ってるよ、頑張ってるよ、頑張った人が大勢だ、そこで二次審査ね、はいお疲れさんが半分以上、そこでまた頑張った人だけが残るでしょ、みんな頑張るよチャンスだから、一つの役の候補枠に平均五人くらいかな、ここまで頑張った人が残って三次審査ね、こうなるともう頑張るとか関係ないから、根性とか執念とか怨念とか、そっちだからね武器になるのは、じゃあそれがあつたとする、見事全国二千人の応募の中から今年の準劇団員が選ばれました、選ばれた皆さんはそのまま新人公演のキャスト候補だ、こりやすごい、さていよいよ稽古が始ります、本読み

やって歌の稽古があつてパートごとの稽古があつてダンスレッスンと演技指導のクラスもある、朝から晩まであちこちの稽古場を行き来する毎日が劇団員でも丸一ヶ月、新人さんは三ヶ月続く、バイトなんかしてる暇ないからね、だから給料出るんだから、ここで脱走者と脱走者が続出、人間関係のゴタゴタが理由になる奴も中にはいるけど、身体壊す奴が三割、心を壊す奴が同じくらい、能無し呼ばわりされて身を退く奴がそれ以上、生き残った凶太い方々が舞台上上がる、初日が開いたらあつという間だからね、熾烈な闘いを勝ち抜いて夢だった舞台にようやく立ったと思つたらもう千秋楽だ、終わつたら次はどうする、考える暇もなく次の稽古が始る、俺なんか親の顔七年見てないよ、それでもいるんだ、まだここに、同期はもう一人も残つてないけどさ、演出部に引つ張られてからはレッスンだって殆ど出られなくて、勿論役なんかつけてもらえないよ裏方なんだから、それでもいるんだ、ここにさ、なんでだかわかる？ なんでだと思つ？、」

神楽坂「給料が、」

大塚「違うよ」

若松「仲間、ですか」

大塚「それも違う」

牛込「女が、」

大塚「違うよ」

河田「責任」

大塚「違う」

青山「居場所が他にないんじゃない」

大塚「そうかもしれないけど、違う」

曙橋「好きだから」

大塚「それも、もう違うんだよ」

青山「じゃあ、なんなんですか」

大塚「なんでだろうって考えないからだよ。考えた奴はみんな辞めてった。俺は考えない。だからまだここにいます。好きだからだのなんだの、理由を考える奴は考えるつ

てだけで才能がないんだよ。才能がないから考えるんだよ、理由を欲しがるんだよ、理由を見つけないと続けていけないんだよ、才能がないから。わかるかな、だからオーデイションするんだよね。アホがいつぱい来るでしょ、その先のことなんか何も考えてない身の程知らずなアホがさ、あんたたちには未知の世界だも

んな、先のことなんか考えられないよな、苛つくことにそれだけでもしかしたら俺たち劇団員よりずっと才能があるんだよ」

青山「（小さく笑う）」

大塚「だから、何も考えずに呼ばれたら行く！」

曙橋「……はい」

曙橋、ぎくしゃくと緊張した足取りで、行く。

大塚、少し見送って、自分も行く。

若松「やっぱり虐げられてる人の言葉にはぴりっとするものがあるよね」

牛込「俺、ちよっと出ちゃった」

河田「医者行きなさいよ、女医じゃないところ」

神楽坂「曙橋さん飛ばしても良かったんだけどなあ」

若松「あんたまだオーディション受ける気だったんだ」

神楽坂「またバイト探さなきゃなあ」

おじさんたち、口々にぼやきながら帰りの身支度を

する。

青山「……俺、仲間が好きだからとか、そこに立つ自分が誇らしく思えるからとか、お客様に夢を与えたいからとかって、いっつも理由見つけてきたもんなあ。ははっ、才能、なかったんだ」

自虐的な笑いの果てに、泪。

河田「あれは逆説ですから」

青山「逆説」

牛込「好きなら余計なこと考えずに進めってこと」

青山「そうなんですか。なんだ、真に受けちゃいましたよ」

牛込「君はあんまりオツムが、」

河田「いいじゃない、素直で」

牛込「ま、難しいことがわからないってのも才能の一つか」

若松「ちよっといい話でしたよね」

牛込「いい話だけど長いんだもん」

神楽坂「あの長台詞の間に先生力尽きて終わっちゃってたりしてな」

皆、顔を見合わせて、そうっと曙橋が向かった方を
窺う。

ひよいと顔を出す曙橋。

曙橋「やっぱり、間に合いませんでした」

神楽坂「ほらあ」

曙橋「なんか、先生、演出席で眠っちゃったみたいで」

あからさまに落胆するおじさんたち。

牛込「俺、来年また来るから」

曙橋「あはは。私、どうしようかな」

若松「来たらしいじゃない。いつか君がステージに上がった
とき、客席から手振るからさ」

曙橋「才能もないけど、運はあるかもって、思ったんですけ
ど、なかったし」

河田「運も才能も関係ないでしょ」

青山「実力ですよね」

河田 「クビになっちゃうしな、私も来年また」

若松 「そうですね、せっかくあれ覚えたんだし」

牛込 「意味があつたんじゃないの、今年はさ」

曙橋 「はい、皆さんのクソミソな人生を背負わされたような

プレッシャーをずっと感じました」

神楽坂 「ちよつと臭うくらいね」

牛込 「出てないよ、冗談だつて」

若松 「なんだ、冗談だつたんだ」

神楽坂 「それで、あんた結局何屋さんなんだっけ」

牛込 「いいじゃないか、そんなこと」

若松 「あ、でももしほんとに焼き鳥屋さんだったら、ちよつ

と寄らせてもらいたいですね」

神楽坂 「ねえ、何焼いてるの、ねえ」

牛込 「せっかくだけど、焼き鳥じゃないからさ」

若松 「なんだ、違うんですか。すっかり焼いてる人だと思っ

てましたよ」

牛込 「まあ、焼いてはいるけど」

河田 「へえ、やっぱり焼いてるんですか」

神楽坂 「ほら、ほらね。焼く顔だもん、これ」

若松 「何焼いてるんですか。あ、ホルモン？」

牛 込 「芋だよ」

神楽坂 「芋！芋かあ」

河 田 「焼き芋屋さんですか」

神楽坂 「じゃあれだ、軽トラにカマドみたいな積んで」

牛 込 「店じゃなくて悪かったな」

河 田 「焼き芋はオフシーズンですねえ」

牛 込 「竿竹もやってんだよ」

若 松 「あの、ちょっとご提案なんですけど、テーマソング作

ったらどうですか。あのひしゃげた声のお決まりの呼

び込みじゃなくて、実はYUKOに当たりそうな若手ア

ーティストがいますですね」

どこかから「コーラスライン」の「ワン」のイント

ロが聞こえてくる。

牛 込 「いいんだよ、物売りは、あのひしゃげた声で」

河 田 「そうですね。あれは、あれがいいんじゃないですか」

牛 込 「（物売りの声になる）いーしやきーい、いもおー：

…えーっ…オイモっ」

河 田 「そうそう」

若松「その声でオーディション受けてるんですか、毎年」

牛込「そうだよ」

神楽坂「それじゃあね」

若松「あ、じゃあ」

河田「じゃあ、お先に」

牛込「じゃあな」

口々に中途半端な挨拶を口にして、去って行くおじさんたち。

曙橋「(青山に) 来年、来ますか？」

青山「んー、どうだろう、秋にもう一件別の劇団のオーディションあるし、そっち受かったら忙しくなるだろうし」

曙橋「そっかあ。受かるといいですね」

青山「うん。受かるといいなあ」

部屋を出る二人の背中で溶暗。

音楽が「コーラスライン」の「アイ・キャン・ド

ウ・ザット」に乗り替わり、カーテンコール。

踊るおじさんたち。

（可能であれば、この曲を丸々一曲、いかにもミュージカルっぽく歌って踊ってください。歌う場合は日本語の歌詞を作ります。）